

原 著

若年者大腸癌の臨床病理学的検討

田村 周三¹⁾, 塩澤 学¹⁾, 渡辺 卓央¹⁾, 三箇山 洋¹⁾,
玉川 洋¹⁾, 山本 直人¹⁾, 森永 聡一郎¹⁾, 赤池 信¹⁾,
湯川 寛夫²⁾, 利野 靖²⁾, 益田 宗孝²⁾

¹⁾ 神奈川県立がんセンター 消化器外科, ²⁾ 横浜市立大学医学部 外科治療学

要 旨: 目的: 若年者大腸癌の臨床病理学的特徴及び予後について対照群と比較を行い明らかにする。方法: 1990年から2008年に当施設で大腸癌に対し治癒切除を行った症例のうち75歳未満の1189例を対象とし, 若年者群 (40歳未満; 29例) 及び対照群 (40歳以上75歳未満; 1160例) の2群に分類し臨床病理学的因子について比較した。また切除後の5年生存率, 3年無再発生存率を比較した。結果: 性別, 重複癌の有無など患者背景に有意差は認めなかった。若年者群は腫瘍径50mmより大きい症例が多く (51.9% vs 30.0% $p < 0.05$), 術後補助化学療法を受けている症例も多かった (65.4% vs 41.3% $p < 0.05$) が, 腫瘍占拠部位や組織型, Stage 分類などの臨床病理学的因子では両群間に有意差は認めなかった。予後については, 両群間に有意差は認めず (5年生存率 84.3% vs 86.0% $p = 0.80$), Stage 毎の予後においても両群間に統計学的有意差は認めなかった。3年無再発生存率は両群間に有意差は認めなかった (3年無再発生存率 70.8% vs 83.1% $p = 0.08$) が若年者群で再発率は高い傾向にあった。結語: 若年者大腸癌は腫瘍径が大きい傾向にある。治癒切除例では若年発症であっても良好な予後が期待できる。症例を蓄積し再発に関する検討を進める必要がある。

Key words: 若年者 (young), 大腸癌 (colorectal cancer)